

英国における新しい大学モデルの形成 ：公開大学モデル成立の前史として

鄭漢模（九州大学）

本研究の目的は、英国（イングランドおよびウェールズ）において英国オープン・ユニバーシティ（以下、UKOU）が設立されるまでの大学を作る主体の変化が有する意味を明らかにすることである。

カナダの教育学者George Fallis（2007, p, 219）は、大学とは常に「場所」であってきており、大学での学びとは常に、同じ時間、同じ場所に集まった人々が作ったコミュニティの中に存在してきたとした。しかし、Fallisが提唱した「場所論」は、1969年に設立されたUKOUには当てはまらない。UKOUは、物理的なキャンパスを持たず、教員と学生は異なる場所、時間の中で各々教え、学ぶ大学である。教員が予め講義資料を作成すると、各学生にはテレビ、ラジオ、インターネットなどのメディア、または、郵送を通してそれが配布され、各学生は自主的に学習活動を行うことになっている。UKOUはある意味「無形」の大学であり、物理的な「場所」ではない。教員、学生によっては「同じ時間、同じ場所に集まった人々が作ったコミュニティ」を一切経験できない可能性さえある。にもかかわらず、各学生は「大学での学び」を貯めていくことができる。

英国における大学の形成及び設立に注目すると、大学の設立に関する主導権を有する主体の変化があったことが分かる。「古代の大学」は、教員と学生が作った学術的なコミュニティが、体系化されていき、自生的に大学を「形成」したケースである。20世紀初頭に設立された大学群を指す「市民大学」は、各地域の市民たちが大学の必要性を認知すると、その地域の資本家、慈善家から投資、または、寄付が行われ大学に準ずるカレッジがまず設立されると、そのカレッジに国王から学位授与件を含むロイヤルチャージャーを授与されることで、大学として認められた。20世紀半ばに設立された大学群を指す「新構想大学」は、本来大学に準ずる教育機関である上級工科カレッジを、政府が大学に昇格させ大学として認定する形で設立された。「古代の大学」が作られた経緯が自生的な「形成」だったのであれば、「市民大学」、「新構想大学」は人為的な「設立」であった。設立の主導権は、「教員、学生」から「市民」に、そして「政府」に移動した。そして、設立の目的は、「市民大学」からは社会的なニーズに変わった。とりわけ、設立の目的の変化から見いだせる大きな特徴は、従来大学として認められていなかった上級工科カレッジを、社会のニーズに応えるために大学と認めるなど、政府の権限が大学の定義にまで拡大されている点である。

こうした新構想大学が主に設立された1960年代、UKOUが設立された。遠隔授業を中心に大学のカリキュラム、教授法、管理運営方法を再構成したため、「本物の大学」として認めない声も上がっていた（cf. Perry, 1981, p.7）。しかし結局、UKOUは大学として認められるようになり、それ自体「公開大学モデル」として全世界的に導入された。それができたのは、ある教育機関を大学として認める権限だけでなく、社会のニーズに応じて大学モデルを再定義する権限が、政府に持たされたためである。